

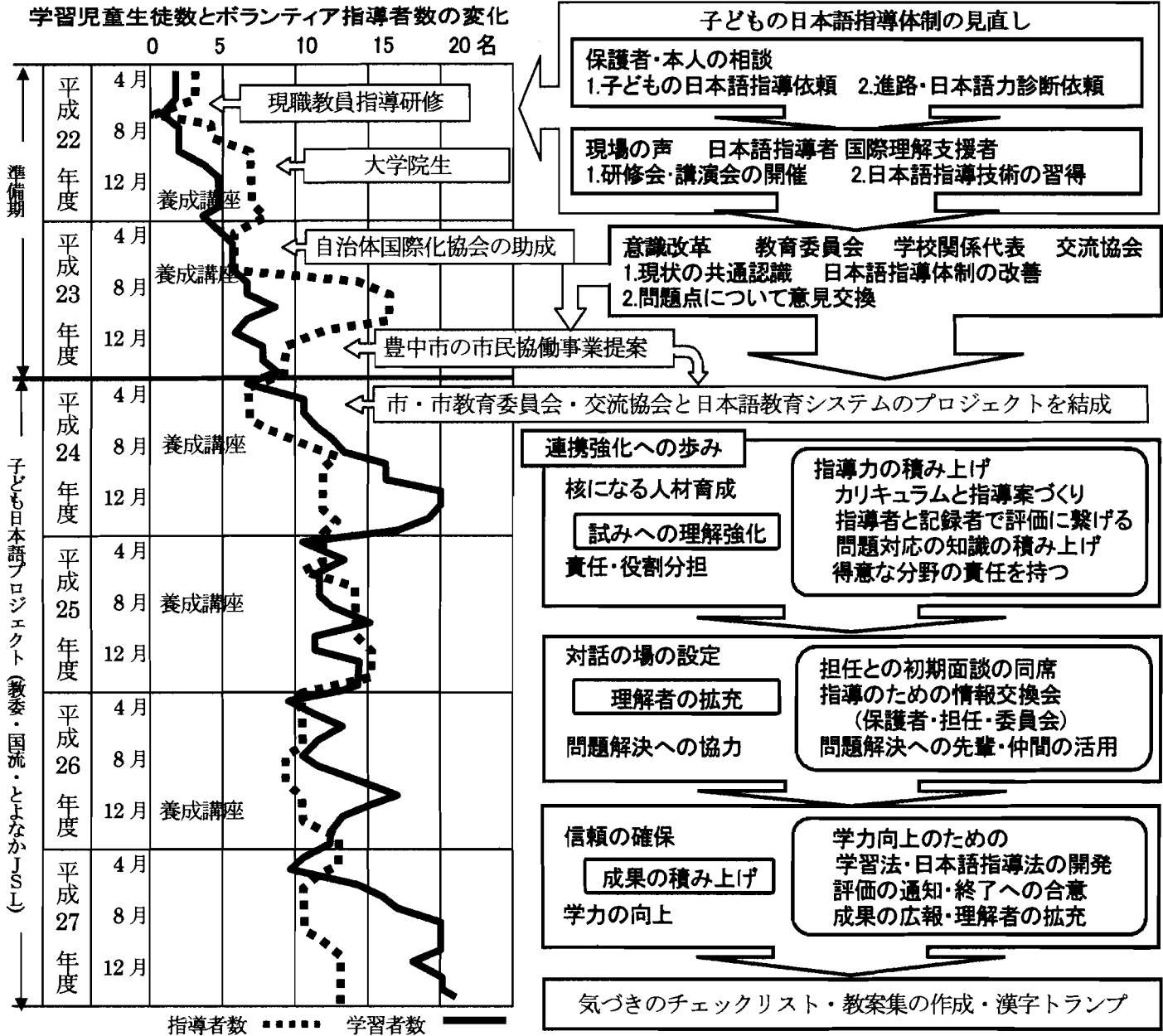
官民一体の日本語教育システム作りの意義

—少数点在地での日本語教育支援のあり方に向けて—

田中薫・阪本清美・末永晶子（とよなかJSL）

実践の場の特徴

大阪府豊中市内の学校に編入する児童生徒が市教育委員会やとよなか国際交流協会との協力で、とよなか国際交流センター内の日本語教室に月・木・土に通級し90分ずつ日本語を学ぶ方式。教案で研鑽を重ねたボランティア集団が、教育委員会・学習者の在籍校と国際交流協会の連携を充実させ、学習力を育てる真の実力を持った日本語指導集団を目指している。



成果	子ども	①信頼できる学びの場ができ、 ②学習意欲を取り戻し、他者への思いやりや感謝の気持ちで笑顔が増えた。
	官民協働	①指導主事が学校との仲立ちで信頼が深まり、 校外指導の場でも年々在籍校との連携が安定し、問題の早期解決に協力体制が整い易くなり、 ②困難を抱える子どもの発見・改善の機会を増やした。
	指導者	①集団で日常的に検証できるので指導力が早く向上し、 ②指導案の積み上げで次代の指導者の虎の巻(教案集・教材)を作り出せた。 ③幼・小・中学生の年齢差を如実に知ることによって教科と日本語の基本がより明確化し、 ④各指導者の得意な分野で交替し学習効率を高められるようになった。